（報告）資料No.2

JFA Football Future Programme 2015

トレセン研修会 U-12

実施報告書

公益財団法人 日本サッカー協会

目次

はじめに 1
1.　本研修会実施の背景 2
2.　研修会概要　目的 2
　2-1.　概要 2
　2-2.　目的 3
3.　ゲーム・トレーニング形式 3
　3-1.　FA 対抗戦（8vs8） 3
　3-2.　クアトロゲーム 4
　3-3.　トレーニング 4
4.　オフザピッチプログラム 4
　4-1.　選手向けアクティビティ 4
　4-2.　水分補給セミナー 4
　4-3.　審判との協調 5
　4-4.　保護者セミナー 5
　4-5.　リフレッシュ研修会 5
5.　研修会オペレーション 5
　5-1.　大会日程 5
　5-2.　組み分け 6
　5-3.　各賞表彰 6
6.　審判 7
7.　指導・運営体制 7
　7-1.　指導体制 7
　7-2.　事務局体制 8
　7-3.　スポンサー 8
　7-4.　医療体制 8
8.　移動 9
　8-1.　集散 9
　8-2.　選手シャトルバス 9
　8-3.　来場者シャトルバス 9
9.　施設 9
　9-1.　宿泊・食事関連 9
　9-2.　会議室 9
　9-3.　駐車場 10
10.　技術的側面 10
　10-1.　総論 10
　10-2.　GK 11
　10-3.　審判員・審判インストラクター 11
11.　補遺　～都道府県 FA からの声まとめ～ 12
　11-1.　成果 12
　11-2.　課題 13
　11-3.　その他（要望など） 13

JFA NATIONAL TRAINING CENTRE

はじめに

本研修会は、U-12 年代全体の環境を改善するために JFA 技術委員会が打ち出した、「U-12 年代のグランドデザイン」における、トレセン活動の充実を促進するための施策として、2015 年度に新設しました。

トレセン活動を充実させていくことは、日常を変える環境作りに向けた大きな取り組みであり、本研修会に関わった全ての選手・指導者・保護者が常に世界基準を意識し、「自分たちの将来を自分たちが変えていく」という意識を持つことが、日本サッカーを変えていく大きな力となります。研修会に参加した選手や指導者がゲームやトレーニングを通じて自分たちの立ち位置を知ること、他チームとの交流を通じて自立と気づきが促されること、そして選手が本研修会で体感したことを日常の活動に戻って活かすことで、「クリエイティブでたくましい選手」の種がひろくまかれることを狙いとしています。そのような観点で考えると、期間中に多くの保護者・来場者が見学に訪れ、子供たちを見守り、セミナーに参加してくれたことや、リフレッシュ研修会に多くの指導者が参加し、海外の指導者ともディスカッションができたこと、ユース審判員や審判インストラクターとも意見交換が出来たことなど、関わる全ての人々にとっての研修の場として、一定の成果は残せたと言えます。

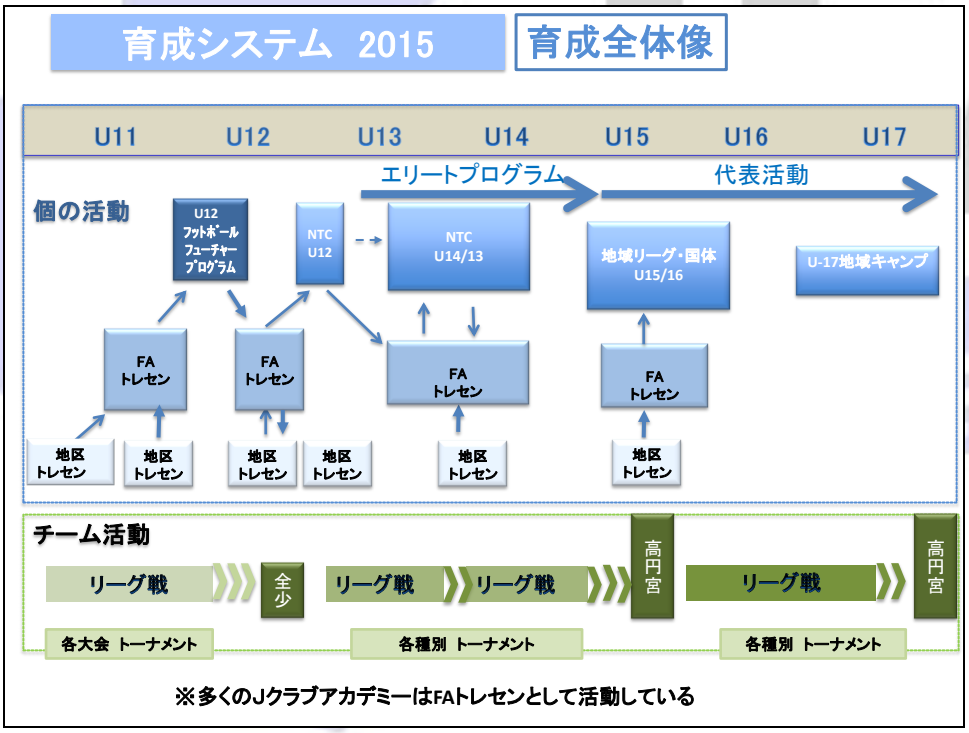
最後に、本研修に参加してくれた帯同指導者、選手を派遣してくれた所属クラブの皆様、スポンサー、保護者、審判団、施設、その他運営全般をサポートいただいた全ての皆様に、改めてお礼を申し上げます。

1. 本研修会実施の背景

JFAではU-12年代のプレー環境を改善すべく、「U-12年代のグランドデザイン」を打ちだし、リーグ戦の定着とトレセン活動の充実を目指している。その施策として、2015 年から年間通じたリーグ戦を全国で導入。これまで夏に行なわれていた「全日本少年サッカー大会」を冬に移行し、年間カレンダーを整備している。

一方トレセン活動の改革としては、従来のナショナルトレセンを地域で継続しつつ、都道府県や地区トレセンの充実に向けて47都道府県からトレセンU-12の選手と指導者が一堂に会する「JFAフットボールフューチャープログラム トレセン研修会 U-12」(FFP)を新設し、リーグ戦や各種大会などの「チーム活動」と、「'個'の強化を目指すトレセン活動」を両立させ、将来有望な選手を育成する流れをより強固にした。

FFP がトレセン活動の新たな柱となることで、各 FA が FFP を目標に地区トレセンや都道府県トレセンを充実させ、選手選考を行うなどの準備を進め、FFPではFAとの交流を通じて成果や課題を含めた自県の「立ち位置」を知り、その後のトレセン活動に再び落としこむ。こうしたプロセスを経て各 FA の資質を向上させていくことを意図している。



2. 研修会概要 目的

2-1. 概要

- 主催:公益財団法人日本サッカー協会
- 協賛:株式会社ナイキジャパン、コカ・コーラ
- 協力:株式会社モルテン
- 期日:2015 年 7 月 29 日(水)～8 月 2 日(日)

- 会場：静岡県　時之栖スポーツセンター（時之栖グラウンド・裾野グラウンド）
- 参加チーム・人数：48 チーム（選手 768 名、指導者 144 名）

2-2.　目的

JFA フットボールフューチャープログラム（FFP）は、静岡県・時之栖スポーツセンター（時之栖グラウンド/裾野グラウンド）の 2 会場を利用し、4 泊 5 日のスケジュールで行なわれた。参加チームは 48 チーム（東京都 2 チーム・各道府県 1 チーム）で、それぞれ 16 名の合計 768 人の選手が集まった。また、各都道府県から JFA 公認指導者資格を保有している帯同指導者 3 名（原則）がチームを引率した。

選手の選考は各 FA に委ねられたが、U-12 年代は成長の個人差が大きい年代なので将来性のある選手をどう見抜いていくか、伸びしろを含めて総合的に見る目を養うために、各 FA でディスカッションを重ねてもらった。

さらに「試合に勝ちたい」という気持ちが芽生えることを考慮し、対抗戦形式を採用した。FFP は競技会ではなく研修であることから、事前に過度のチーム強化を行なわず、トレセンの目的である‘個の育成’を促し、より多くの選手に刺激を与えることに重点をおいた。各地域のナショナルトレセンコーチは事前に各　FA　の選手選考をサポートしたほか、FFP では 1～2 つの FA を担当し、帯同指導者とコミュニケーションを取りながら情報を共有する役割を担った。

3. ゲーム・トレーニング形式

3-1.　FA 対抗戦（8vs8）

48 チームを 4 チームずつ 12 グループに分け、1 次ラウンドでは、3 ピリオド制で 8 人制の試合をそれぞれ 3 試合行った。さらに、試合の勝敗には関わりなく試合終了後に 3 人ずつの PK 戦を実施した。グループリーグにおける勝点だけでなく、試合における総得点、PK のポイント、さらにはクアトロゲームの勝ち点（3-2　参照）を算出し、拮抗した試合が行われるように、2次ラウンドの組み合わせを決定した。2 次ラウンドでも 4 チームずつ 12 グループに分け、再び 8 人制の試合を 3 試合行った。

1 次ラウンド、2 次ラウンドともに、1 ピリオドと 2 ピリオドで全選手の交代を義務付けることで、選手のプレー機会の確保を図るとともに帯同指導者がポジションや組み合わせを常に考える機会とした。1 次ラウンドの全試合で導入した PK 戦では、緊張感の中で PK を蹴る経験をより多くの選手に積ませることを目的とし、試合ごとに必ず違う選手が蹴ることとした。また、得点を奪うことでポイントが加算される方式にすることで、点差がついても最後まで積極的にゴールを奪う意識を植え付けた。帯同指導者からは、「他地域となかなか試合をする機会もないので、貴重な経験ができた」「自分たちの現状の成果と課題を確認することが出来た」との声もあった。

なお、全試合ナショナルトレセンコーチがウェルフェアオフィサーとして試合に関わった。

3-2. クアトロゲーム

正規ピッチ 1 面あたり、20m×30m のコートを 6 つ作り、6FA の選手がミックスしながら、試合毎に違う選手同士でチームを作り、4vs4 のゲームを行った。8 分間（途中から 6 分に短縮）の試合を 1 選手が 6 回戦い、勝敗・得点数を争う形式とした。クアトロゲームで個人が獲得した勝ち点もリーグ戦のポイントに換算する方式を採用することで、個々が全力でプレーすれば自分の FA の勝ち点につながるという意識を持たせた。なお、閉会式ではクアトロでの個人のポイント上位 6 名を表彰した。

選手個々がテクニックを駆使しながら、周りと関わることで、個の能力を発揮していく姿や、他の FA の選手たちと試合前にコミュニケーションを取りながら試合に臨む姿が見られた。

3-3. トレーニング

期間中に 2 回、1 チームあたり 1/4 ピッチを割り当ててトレーニングを行った。試合で見つけた課題をトレーニングで克服・修正し、次の試合に活かすという M-T-M の原則に基づき、トレーニングは各チームにその内容を委ね、地域のナショナルトレセンコーチがサポートに入りながら実施した。

4. オフザピッチプログラム

4-1. 選手向けアクティビティ

サンフレッチェ広島　皆川佑介選手、日本代表OB　北澤豪選手をゲストに招き、選手向けにレクチャーを行った。「どのような子供時代を過ごしたか」「プロ選手は普段どんなことに気を付けて過ごしているのか」「何を意識してトレーニングをしているか」など、話を聞いた子供が日常から実践する意識を持てるような内容で話をしてもらい、選手からも積極的な質問が発せられ、多くのことを吸収しようとする姿勢が見られた。なお、宿泊会場が 2 箇所に別れたため、セミナーも 2 回に分けて実施した。

4-2. 水分補給セミナー

集合日（7/29）の開会式後に、協賛社であるコカ・コーラ社の主催による水分補給セミナーを実施した。ゲストに山口慶氏、下村東美氏（共に元ジェフ千葉プロサッカー選手）を迎え、パフォーマンス向上に有効な水分補給に関するセミナーを行った。映像やクイズ等を交え、飽きない工夫をすることで、選手たちも最後まで真剣にセミナーを聞いていた。

なお、開会式会場が 2 箇所に別れ、かつ時間帯も 3 つに別れたため、セミナーは都合 6 回に分けて実施した。クイズの優勝チームにはアクエリアスの粉末をプレゼントするなど、協賛社の物品提供や露出にもつながった。

4-3. 審判との協調

各 FA から参加したユース審判員、審判インストラクターと、ナショナルトレセンコーチの合同会議を実施し、質の高いゲームを作り上げるために、指導者と審判でどの様な協調ができるか意見交換を行った。

4-4. 保護者セミナー

筑波大学准教授　中山雅雄氏による「自立した子供に育てるには」をテーマにした講演を、8 月 1 日(土)の午後に 2 回行った。中山氏は「子供は親の愛情を受けて育ってこそ、自立していく」と説明したうえで、「子供の成長のためにはしっかりと親が支えていかなければならない」とメッセージを送った。各回とも約 60 名の保護者で会場は満員となり、熱心に耳を傾けていた。

4-5. リフレッシュ研修会

8 月 1 日～2 日の 1 泊 2 日でリフレッシュ研修会を行った。48 名が参加し、トレセンの意義の共有や日常活動へのフィードバック方法などをテーマに、講義・実技を取り入れた 40 ポイントの研修会を実施した。講義は御殿場高原時之栖で、実技と FFP の視察は裾野グラウンドでそれぞれ行った。

5. 研修会オペレーション

5-1. 大会日程

	7月29日		7月30日		7月31日		8月1日		8月2日	
	時之栖G	裾野G	時之栖G	裾野G	時之栖G	裾野G	時之栖G	裾野G	時之栖G	裾野G
8:00								(一部移動)		(一部移動)
				(一部移動)			トレーニング 2-(1)	トレーニング 2-(2)		2次ラウンド
9:00			1次ラウンド	1次ラウンド		(一部移動)				
					クアトロゲーム	クアトロゲーム				
10:00							トレーニング 2-(3)	トレーニング 2-(4)		
11:00										
	集合							(一部移動)		閉会式
12:00	トレーニング 1-(1)									
				(一部移動)		(一部移動)	トレーニング終了後宿舎に戻り昼食			解散
13:00			試合終了後宿舎に戻り昼食		クアトロゲーム終了後宿舎に戻り昼食					または
	集合	集合						(一部移動)		昼食後解散
14:00	トレーニング 1-(2)	トレーニング 1-(3)		(一部移動)				2次ラウンド		(弁当)
			1次ラウンド	1次ラウンド						
15:00					アクティビティ					
	集合	集合								
16:00	トレーニング 1-(4)	トレーニング 1-(5)								
						アクティビティ				
17:00										
18:00	トレーニング後、開会式、水分補給セミナー、夕食			(一部移動)						
			試合終了後宿舎に戻り夕食		夕食			(一部移動)		
19:00							夕食			
20:00										
21:00							帯同指導者意見交換会	帯同指導者意見交換会		
	(一部移動)									
22:00	帯同指導者説明会									

5-2. 組み分け

【1 次ラウンド】

	1	2	3	4		1	2	3	4
1 組	東京 2	宮城	福岡	愛媛	7 組	栃木	秋田	長崎	新潟
2 組	埼玉	青森	鹿児島	福井	8 組	神奈川	岩手	佐賀	高知
3 組	千葉	長野	沖縄	徳島	9 組	東京 1	山梨	大分	石川
4 組	茨城	山形	熊本	香川	10 組	群馬	福島	宮崎	富山
5 組	愛知	広島	京都	和歌山	11 組	岐阜	鳥取	山口	兵庫
6 組	静岡	岡山	北海道	大阪	12 組	三重	島根	滋賀	奈良

【2 次ラウンド】

	1	2	3	4		1	2	3	4
A 組	大阪	新潟	愛知	山梨	G 組	栃木	北海道	愛媛	滋賀
B 組	兵庫	岩手	東京 2	茨城	H 組	徳島	佐賀	富山	大分
C 組	群馬	神奈川	長野	青森	I 組	島根	秋田	香川	沖縄
D 組	宮崎	福岡	宮城	岐阜	J 組	和歌山	福井	石川	岡山
E 組	広島	千葉	埼玉	三重	K 組	鳥取	福島	長崎	高知
F 組	熊本	奈良	静岡	東京 1	L 組	山口	鹿児島	京都	山形

【クアトロゲーム】

ピッチ	1	2	3	4	5	6
時 A	北海道	福島	埼玉	愛知	兵庫	島根
時 B	山梨	秋田	群馬	静岡	滋賀	広島
裾 B1	宮城	東京 1	富山	奈良	高知	熊本
裾 B2	岩手	東京 2	福井	和歌山	徳島	大分
裾 C	山形	神奈川	三重	鳥取	愛媛	宮崎
裾 D	青森	千葉	石川	大阪	香川	長崎
裾 E1	茨城	新潟	岐阜	岡山	福岡	沖縄
裾 E2	栃木	長野	京都	山口	佐賀	鹿児島

5-3. 各賞表彰

- ゴールデンブーツ(最多得点者):11 点　岸本怜緒／智頭 FC(鳥取)
- ゴールデングローブ(最優秀 GK):山形慈温／アイリス住吉(大阪)
- Most Impressive Team:山梨県※GK も含めた 8 人全員で効果的に関わり続けるサッカーを志向し、日本サッカーが目指す理想像となるような最も印象に残ったチーム。山梨県が受賞した理由としては、常に攻守に効果的に関わり続けようとしており、守備に関しては、選手一人ひとりがゴールを守り、ボールを奪う意識を忘れないように全力でプレーしていたことが評価された。

- クアトロ個人成績上位 6 名
  1. 宮下菖悟／ARTE 八王子（東京 2）
  2. 淀川誠珠／COPAMUNDIAL FC SENDAI（宮城）
  3. 根木賢聖／SS クリエイト（大阪）
  4. 木脇蓮苑／木之川内 SSS（宮崎）
  5. 松原輝空／徳島 FC リベルモ（徳島）
  6. 佐々木穂乃花（女子）／福田 SSS（青森）

6. 審判

全国で活躍するユース審判に活動機会を創出すべく、各 FA から推薦を受けた 43 名のユース審判員が本研修会に参加。JFA 審判インストラクター12 名、都道府県 FA 育成担当審判インストラクター（42 名）がユース審判員の指導にあたった。ユース審判員は、1 次ラウンド、2 次ラウンドの全 144 試合を一人制審判で行った。

	7月29日		7月30日		7月31日		8月1日		8月2日	
	審判員	INS	審判員	INS	審判員	INS	審判員	INS	審判員	INS
8:00									（移動）	（移動）
			（移動）	（移動）	プラクティカルトレーニング		プラクティカルトレーニング		審判実技（2次ラウンド）	
9:00			審判実技（1次ラウンド）			（2）		（4）		
10:00					競技規則テスト	ディスカッションまとめ				
11:00										
						後半組集合			閉講式	
12:00					昼食　前半組解散		昼食		解散	まとめ
13:00			試合終了後各会場にて昼食		講義					
					トレーニング理論		（移動）	（移動）		解散
14:00	集合				実践フィジカルトレーニング	（3）	審判実技（2次ラウンド）			
	開講式		審判実技（1次ラウンド）							
15:00						後半組開講式				
	プラクティカルトレーニング				ゲーム					
16:00		（1）				講義 技術と審判の協調				
17:00					アクティビティ					
					技術と審判の協調					
18:00	夕食									
			夕食		夕食		夕食			
19:00										
	講義		講義		講義		講義			
20:00										
	ワークショップ	ディスカッション	ワークショップ	ディスカッション	ワークショップ	ディスカッション	懇親会	ディスカッション		
21:00										
22:00										

7. 指導・運営体制

7-1. 指導体制

本研修会では各チームの帯同指導者の他に、総責任者池内豊（JFA ユース育成サブダイレ

クター)、GK 責任者川俣則幸(JFA ナショナルトレセンコーチ)の下、37 名の JFA ナショナルトレセンコーチ、JFA インストラクターが参画した。またユース審判員と、都道府県でユース審判員の指導にあたる審判インストラクターを指導するため、高橋武良(審判委員会普及部会長)の下、11 名の JFA 審判インストラクターが参画した。

7-2. 事務局体制

本研修会では自主運営の下、代理店、都道府県サッカー協会からのサポート人員を最低限に抑え、グラウンドの設営・撤去などは、ナショナルトレセンコーチを中心に実施。帯同指導者には、該当試合のピッチ責任者として、運営面でのサポート(試合運営や記録)を行って頂いた。

一方で、大型研修会による開催地への経済波及効果があると見込み、全日本少年サッカー大会同様に、裾野市・御殿場市が「富士山すその支援委員会」を立ち上げ、会場の休憩テントや三島駅⇔時之栖(御殿場高原ホテル)間のシャトルバス運行などの支援が得られた。

運営要員は以下の通りであった。

- 技術部:時之栖と裾野に分かれて運営。
- 審判部(2 名):帝人アカデミー富士にて、審判団の各種調整を担当。
- 富士山すその支援委員会:会場のブース出展、シャトルバスの運行
- 読売旅行:期間中の選手・来場者シャトルバス運行管理、発着サポート
- 静岡帝国警備:車両進入規制、駐車場警備、来場者誘導
- 広告代理店:スポンサー対応を中心に御殿場会場・裾野会場で研修会をサポート

7-3. スポンサー

協賛社、協力社より下記の提供を頂いた。

- 株式会社ナイキジャパン:ビブス、バインダー、スタッフポロシャツ、シューズケース
- コカ・コーラ:飲料スクイズボトル(各選手に 1 本)、クーラータンクを提供頂いた。
- 株式会社モルテン:4 号球

7-4. 医療体制

期間中は御殿場会場・裾野会場にそれぞれドクターに常駐してもらい、夜間を含めた傷病に備えた。また、後方支援病院として、フジ虎の門病院、荒川クリニックとも事前に連携をとり、スムーズな受診体制を整えた。さらに、夏季のイベントであることを考慮し、試合前にはWBGTを計測して、こまめな水分補給と、的確な選手交代を促すとともに、熱中症患者の発生に備えて休養する為の予備の部屋を確保した。来場者の休憩場所として、十分な数のテントを用意し、観戦環境にも配慮した対策を行った。その結果、期間中は選手・指導者・来場者を含めて重度の熱中症が発生することなく、無事にイベントを終了することができた。

8. 移動

8-1. 集散

旅行会社の協力の下、事前に各 FA に移動手段と経路の提案を行った。全国から選手が集まることを考慮し、到着からトレーニングにスムーズに入れるような旅程で手配を行った。来年度は移動に関する計画の再考が必要であると感じた。

8-2. 選手シャトルバス

時之栖グラウンド⇔裾野グラウンド間を往復する選手専用シャトルバスを、スケジュールに応じた細かなダイヤで運行した。また、選手宿舎付近からの発着とすることで、移動負荷の軽減、一般来場者との混線を避けた。

8-3. 来場者シャトルバス

三島駅と時之栖グラウンド間は、時之栖の定期運行便に加え、富士山すその支援委員会が増便したバスを、時之栖グラウンドと裾野グラウンド間は、一般来場者専用シャトルバスを、それぞれ運行した。

当初、7 月 29 日や 8 月 1 日午前など、トレーニングしか実施しない時間帯にはシャトルバスを運行しない予定だったが、乗車場所に来る来場者が多く、待機列が長くなったため、急きょ施設側の協力でマイクロバスを出すなど、柔軟な対応を行った。

9. 施設

9-1. 宿泊・食事関連

時之栖に 31 チーム、裾野に 17 チームが宿泊した。時之栖に宿泊しているチームで、裾野で試合があるチームは、バスで 20 分移動する必要があるため、時之栖宿泊チームは、食後すぐに移動せねばならなかったり、試合後のクールダウンが十分に行えなかったりなど、若干の慌ただしさがあった。また、女子選手に関しては 7 名が参加したため、同部屋にて対応した。

食事に関しては 3 食ともビュッフェスタイルであったが、各チームの指導者がバランスのとれた食事を摂るように指導していた。アレルギー選手の情報も事前に共有することで、期間中に問題になることはなかった。

9-2. 会議室

裾野の大部屋に宿泊しているチームに関しては基本的に自チームの部屋を利用しての会議を促した。クラブハウス 2 階の研修室も自由に使えるように開放した。

御殿場宿泊チームに関しては、施設内のバンケットホールやブルーベリーロッジ前の会議室を開放した。特に時間等は割り当てず、譲り合って使ってもらう運用にした。

9-3. 駐車場

一般来場者、帯同指導者の駐車場は御殿場グラウンドのみとし、裾野グラウンド周辺には用意しなかった。警備を立てたことで、近隣企業やコンビニへの長時間駐車などは発生しなかった。

10. 技術的側面

10-1. 総論

この研修会を通して、U-12 年代のプレーの質は、数年前と比べ間違いなく向上したことがわかった。これは、日常のチーム活動とトレセン活動の成果であろう。また、当初の予想通り、潜在能力の高い個が集まっているだけあって期間中にお互いに更に高め合う効果を生んでいた。逆に期間中に選手のパフォーマンスが下がっていった FA もあったことが事実で、選手選考方法や指導者の関わり等の課題も出ていた。全体のプレーの質が上がってきたからこそ、世界を基準にして

- 動きながらのテクニック
- タイミング（駆け引き・マークを外す）
- 状況に応じたポジショニング（攻守で関わり続ける）
- フィニッシュの精度
- 選択肢のあるプレー（攻守）

を更に向上させることが必要になっていた。ゲームの全体像では、全員攻撃・全員守備（連続した攻守）を志向し、攻撃はゴールへ向かう（ゴールを奪う）ことを常に意識しながら、多彩な攻撃で意図的な組み立て（観る・タイミング）、クロス、崩し（3人目）の質を追求していく。守備はボールを奪う（攻守の切り替え・積極的な守備）ことを常に意識しながら、予測・判断、連動した守備、守備テクニックの向上（体軸・ヘディング）を目指す。指導者は「プレーの質にこだわり妥協をしない！」、「本気で日常を変える！」ことが大切であることをこの研修を通して確認ができたと信じている。

この研修を終え、帯同指導者が多くの感想を述べている。「トレーニングで取り組んでいることが、本当に必要だと選手が実感した」、「ゲームで考える選手が増え、判断を変える勇気を持てるようになった」、「選手に情報収集を促したことで、選手同士で話し合うようになった」など。帯同指導者は一様にこの研修会の成果を確認していて、各 FA の課題克服のための良いきっかけづくりとして評価していた。これを機会に各 FA の U-12 年代の日常活動の充実、質の向上（トレーニング・指導者）を求め、子どもたちが無理なく集まれる地区トレセンで定期的な開催（月2回～月4回）、スタッフのさらなる研修（ライセンス受講）、地域スタッフの FFP やナショナルトレセン等への参加をお願いしたい。とは言え、帯同スタッフのほとんどの方は、平日開催にも関わらず仕事を休んでこの研修会に参加してもらっていた。各 FA の発展に対して、ナショナルトレセンコーチのサポート体制を整えていくことも今後の大切な役割だと考える。（JFA ユース育成サブダイレクター池内豊）

10-2. GK

GK は各チーム 2 名、175cm の大型選手から 140cm の小柄な選手まで、女子選手1名を含む個性溢れる 96 名が参加した。レギュレーションにより 8 人制の試合では、第 1 ピリオドと第 2 ピリオドでの全員交替が義務付けられていたため、1 チームに 2 名居る GK も 3 つのピリオドのうち、第 1 または第 2 ピリオドにプレーすることとなり、ほぼ均等なプレー機会を得ることが出来た。最初のゲームでは、判断に迷い消極的なプレーが見られたり、ボールをしっかり掴めない等テクニック面での課題も見られたりした。しかし、トレーニングとゲームを重ねることによって、最終日には自信をもって判断し、それを味方に伝えてテクニックをしっかり発揮できている場面も沢山見ることができた。特に、この年代で課題と言われている空中のボールのオーバーハンドキャッチにも向上が見られた。攻撃面でも、GK がチームのビルドアップに積極的に関わる場面も沢山見られた。この年代から足元のテクニックを磨き、ストレスなくビルドアップに加われるようになる事により、GK としての将来の可能性を広げることに繋がる。また、クアトロゲームでは、GK もフィールドプレーヤーと遜色無いプレーを見せ、他の FA の選手達と交流するだけでなく GK がリーダーシップを発揮する場面も見られた。この短期間で選手が見せた大きな成長に、この年代の選手の持つ可能性を改めて実感することが出来た。参加した選手達は、ここで学び得たものが、この研修会だけで終わらないように継続して取り組んで貰いたい。また参加された指導者の皆さんも、選手達を更に成長させられるような関わりを継続して頂きたい。(JFA ナショナルトレセンコーチ川俣則幸)

10-3. 審判員・審判インストラクター

本研修会ではテーマを「基礎・基本の習得」とし、審判活動の基礎となる「日常のフィジカルトレーニング」をはじめ、「スポーツとしてのサッカー」そのものの理解や「大会役員としての審判員の役割」などの研修を行った。また、審判実技では、全試合を一人制審判で行い、参加した 43 名の U-18 審判員全員が担当することができた。その様子として、

- 競技者がどのようなプレーをしようとしているのか、どんな接触があったのかを、「見て、判断して、試合を進める」ことを強く意識していた。
- 多くの審判員は、できるだけプレーの近くで、良い角度で見ることにチャレンジしていた。
- 自分から研修内容を深めて理解し、身につける姿勢が乏しいことが今後の課題である。
- 「試合を進めるため」に行わなければならない基本的な知識の理解が曖昧だったり、手順やシグナルに自信がなかったりする審判員が多く見られた。

またあわせて本研修会にユース審判員育成担当者を招集し、以下の点について共通理解を図った。

- 審判員が選手としても活動することは極めて重要で、両立させるためには、チームや指導者の理解と協力が不可欠である。そのため今後も「審判と技術との協調」や「大会役員としての審判」についての取り組みを進める必要がある。
- ユース審判員への指導では「基礎・基本となること」を繰り返し習得する機会を作ること、「自分で考え、見つけ出す」ように指導することを、指導側が共通に理解して実践する必要があ

る。そのためにも「指導指針と指導法」の確立が急務である。

全国から意欲をもって参加してくれた審判員に大きな可能性を感じるとともに、各 FA で「今、彼ら、彼女らが身につけようとしている技術」ではなく、まず「基礎・基本となる姿勢（サッカーをプレーすることを含めて）」を身に付けさせる指導を行うことが、より多くのユース審判員を生み出す土壌をつくり上げることとなる。そのためにも先進事例を参考にし、各 FA での取り組みを強化していく必要がある。（審判委員会普及部会長　高橋武良）

11.　補遺　～都道府県 FA からの声まとめ～

11-1. 成果

- 全体
  - 他地域との交流を通して、選手・指導者ともに全国における現在の立ち位置が明確になった。
  - これまでのトレセン活動で取り組んできたテーマを実行することができ、その重要性を改めて実感することができた。
  - ５日間という日程を通して選手が成長していく姿を見るとこができた。
- 選手
  - 攻撃においては、個々のテクニックを活かして失敗を恐れずにゴールに向かって積極的にチャレンジしていた。
  - GK を含めて DF ラインから攻撃を組み立てる意識は浸透してきた。
  - 動きながらのボールコントロールや狭い局面でもボールを失わずにプレー出来た。
  - 守備においては、攻撃から守備への切り替えを速くして、できるだけ相手のゴールに近い位置でボールを奪おうとする積極的な守備を行えた。
  - 普段のトレセン活動では行えない、自分たちの試合の映像を観て、問題点の共有や解決策を自分たちで話し合うことができた。
- 指導者
  - 最初は相手の早いプレーに何もできなかったが、期間中に少しずつ対応できてくる選手も出てきた。普段から良いトレーニング環境を与えればさらに選手が変わっていくことに気づくことができた。
  - 帯同指導者が選手に様々なポジションを経験させるとともに、ミーティングでゲームの狙いを確認するなど、目的を持って選手への関わりを持ってくれた。
  - ナショナルトレセンコーチとしてコーチングのスタンス（自立を促し、思考を停止させないコーチング）を示し、ベンチにも同席してコーチングに関わったことで、コーチたちのコーチングの変化、選手の変容につながった。
  - オフ・ザ・ピッチの時間を長く過ごせたことで、普段のトレセン活動では見られない選手の新

たな一面を見ることができた。

11-2. 課題

- 選手
  - 日常と違う、レベルの高いチームの強いプレッシャーを受けた時の視野、動きながらのコントロール、タイミングの良い動き出し。
  - 決定機でのコントロールとシュートの精度。
  - オフザボールの時のポジショニングや動き、情報の取り込み。
  - 相手の守備の状況を観た上での意図を持った駆け引きや状況に応じた仕掛け。
  - 選手同士のコミュニケーションによる意図的なボール奪取。
  - 選手の特徴はあるがサッカーの全体像の理解が薄く、攻守に於いて個になってしまうところが勝敗に大きく関係していた。
- 指導者
  - 選手選考についての共通理解の不足。
  - チームや種別を超えて多くの活動に参加できるスタッフの確保。
  - 今回あがった課題に対する地区トレセンやチーム単位での継続した取り組み。

11-3. その他（要望など）

- 指導者
  - 宿泊を伴う行事で指導者がすべきことを丁寧に指導する必要性を感じる。4 種の指導者は、教育関係者でないことが多く、生活面での関わり方に必ずしも適切ではない様子がみられたように感じる。
  - 帯同スタッフ対象の指導者講習会を行い、ベースとなるトレーニングの意図や、コーチング法などを共有すべき。その上で、各県でのフィードバックについて、確認するようなこともあってよい。
- 運営
  - クーラーボックスの数、氷の手配など、熱中症対策については改善する必要がある。
  - レンタカー（今回は4FA が使用）利用が可能であれば氷や飲料水など買い出しに行けた。
  - トレーニングが FA 主体であることを事前に知らせてもらえればより充実したものにできた。
- 研修会プログラム
  - 対抗戦のグルーピングに下記のような工夫があればよかった。
    - ✓ 1次リーグの成績で4グループに分け、地域性を考慮したグループで2次リーグ実施。
    - ✓ 最初に6ゲームの相手を決め、その中でゲームとクアトロゲームのポイントで順位決定する。
    - ✓ 順位を決めない方がいいのではないか。（順位は決めるべきという意見もあり）
  - スケジュールはゆとりがあってよかった。
  - アクティビティは話を聞くだけではなくリスペクト活動もあるといいのではないか。

JFA
NATIONAL
TRAINING
CENTRE